

第六章 結 論

殖産興業政策の路線にそって、近代工業の職工養成と、土着の伝統工業の近代化という二重の目的を持って制度化された徒弟学校は、どちらかという、後者の目的の方に主眼を置いていたといえる。しかし、日本の工業の中心が、軽工業から急速に重化学工業に転化する過程にあって、徒弟学校を含む工業教育機関に対する社会的要請は、急激に後者の目的から、前者の近代工業に対応する職工養成の方に变化していった。この様な変化の中で、徒弟制度の近代化という徒弟学校のいま一つの重要な課題の放棄でもあった、「徒弟学校規程」の廃止に伴い、徒弟学校は、工業学校へ上昇するか、廃止されるか、一般教育に傾斜するかのいずれかに分かれることが明らかになった。

工業学校へ上昇した徒弟学校は、男子型徒弟学校のみで、これらの徒弟学校は、近代機械工業に対応する徒弟学校か、伝統工業の地域産業基盤の強い地方の伝統工業に対応する徒弟学校であった。かつこれらの徒弟学校は、設置主体の財政基盤が強いことを条件としていた。

廃止型徒弟学校の中心は、伝統工業の地域産業基盤の弱い地方に作られた伝統工業に対応する徒弟学校であった。

一般教育に傾斜していった徒弟学校は、女子型徒弟学校のみで、女子型徒弟学校のほとんどがそうであったといえる。又、この傾向は明治40年を境にして現われ、大正年代に入って決定的になった。

以上の様に、同じ「徒弟学校規程」にもとづいて設置された徒弟学校でありながら、この様な違いを生じたのは、興味ある事実である。

徒弟学校と同じ、技能者養成機関である公共職業訓練の、今後のあり方を考える上で、徒弟学校の変遷から教訓を引き出すためには、さらにくわしい分析が必要だと思ふ。私はこの研究で法令全書と文部省年報を中心に使用した。しかし、佐藤氏らは、学校のカリキュラムや、その学校が置かれている社会環境にまで立ち入った研究を行い、徒弟学校の変遷の原因をくわしく分析し、明らかにしている。私のこの研究を完結させるためにも、佐藤氏らと同様、学校のカリキュラムや社会環境にまで立ち入って研究を進め、徒弟学校の変遷の原因を明らかにする必要があると思ふ。特に下記の種類の徒弟学校について、この研究を進める必要があると思ふ。

- 伝統工業の学科のみで工業学校へ上昇していった徒弟学校。
- 伝統工業に対応する徒弟学校で廃止になったものの内、染織を学科とするもの
- 近代機械工業に対応する徒弟学校
- 木材加工工業に対応する徒弟学校

又、女子に対する工業教育は、現在の公共職業訓練においても軽視されているといえる。しかし、徒弟学校制度においては、当初、女子の工業教育も意図していた。この女子型徒弟学校が、工業教育から離れ、一般教育へ傾斜していく過程を、カリキュラム、社会環境の変化も含めて研究していくことは、女子の工業教育のあり方を考える上で必要なことと思ふ。以上が今後の課題でもある。